

# ロシアナのロシアな話—お部屋拝見！編— ／いちのへ友里

天井の高さが外国風なワンルーム。アンティークのランプ。バルコニーへと続く白い扉。レトロな花柄のソファ。木製のどっしりと重厚なデスク。これが、ヴァヴィロヴァ通り79番地41号室の私の部屋です。



イラスト 岩井正幸

まるで1年分の日光をプレゼントするみたいな白夜のこの季節、モスクワでは夜の9時ごろまで昼

間のような明るさです。6階の森に面した大きな窓から差し込む夏の光が、部屋の隅々まで照らしだすと…。天井近くの壁紙が、どうも曲がっているように見えます。扉の白さは、ちょっとムラがあるように思えます。机の引き出しは、なんだか閉まらないように感じます。

ウイークデーをモスクワ都心の集合住宅で過ごし、週末はダーチャ(菜園付きの郊外の家)で過ごす多くのロシア人は、何でも自分でやっつけてしまいます。家を建て、必要な野菜を作り、時には自動車も修理してしまいます。もちろん、壁紙だって張り替えますし、ペンキだって塗り替えますし、日曜大工はお手の物。

自分で何とかしてしまうためか、ちょっとした失敗も日常茶飯事。日本人の感覚で考えると、やや大ざっぱな仕上がりでも、それもまた手作りの味として寛容に受け止められているのかもしれない。

ソ連時代、皆が平等に幸せであるために、それぞれが特殊な専門職や職人になって役割分担するよりも、すべての人が同じように自分のことは自分でやるスタイルが確立されたのかもしれない。明日がどうなるかも分からない日々のなか、人に甘えず、人のせいにもせず、信頼できる自分自身による対処こそ、最も確実な方法だったのかもしれない。

さて、アナウンサーにぴったりね、と青森の祖母が見立ててくれた夏用の白いジャケット。

「そろそろクリーニングに出したいのですが」と言うと、「どうなっても構わないのならば出してみれば」との周囲の反応。「ええ？大切な服だからこそ、クリーニングに出したいのですが…」と私。

「それなら、やっぱり自分で洗うことだね！」

(モスクワ在住、ロシア国営放送「ロシアの声」アナウンサー)